（第3種郵便物認可）　【全面広告】　高知新聞　1996年（平成8年）8月11日（日曜日）　☆☆（24）

高知の医療・福祉を考える（その4）

医療における哲学と宗教。

医療法人山本会理事長　山本浩志氏
救急病院「南国中央病院」
老人保健施設「夢の里」
訪問看護ステーション「南国」
在宅介護支援センター「まほろば」
ボランティア「命のベンダント」

前回は現代医療に対する「科学」の立場からのお話でしたが、今回は「哲学」と「宗教」についてのお話をうかがいました。またあわせて、自律神経失調症や老人性痴ほう症といった心の病気についても、先生独自の考え方をうかがいしました。

山本 浩志氏

哲学は「疑う」こと、宗教は「信じる」ことが出発点。

――今回のテーマは、「医療における哲学と宗教」ということですが、哲学と宗教というものを先生はどのようにお考えですか。

私は哲学も宗教もつきつめれば、「人間の幸福」とか「いかに生きるか」といった問題を考え、それを判断していくものだと思っています。ただその判断の方法は、哲学と宗教ではまったく違っています。

哲学はなぜという問いから出発して、究極（絶対）の真理を探求していくのに対し、宗教は神や仏といった絶対的真理が初めから与えられているものです。つまり哲学はなぜという問い（疑い）が出発点であるのに対して、宗教は神を信じるかどうかの信仰がその出発点となります。「疑うこと」と「信じること」はまったくの正反対で、そこに哲学と宗教の本質的な違いがあると思っています。

宗教についていえば、それを信じることができさえすれば、人生の絶対的な真理が初めから与えられているだけに、それに従って生きればよく、ある意味では楽といえるでしょうね。

それはちょうど算数に対する数学の代数のようなものです。哲学が算数で、宗教が代数です。算数のつるかめ算では、全部がつるであったらとか、かめであったらとか、いろいろ考え迷いながらつるとかめの正解の数を求めていきます。一方代数では、つるの数＝a、かめの数＝bというように、初めからa、bという答えが与えられています。あとは方程式を解くだけでよいですからそれだけ楽といえます。

別の言葉でいえば、哲学は現実から真理を求める帰納的な思考方法であり、宗教は与えられた真理でもって現実を考える演繹的な思考方法であるといえます。その意味では、現実主義者は哲学的であり、理想主義者は宗教的です。だから往々にして議論はかみあわないものです。

――私たちが医療や福祉について、あぁした方がよいとか、こうした方がよいと考えるのは、広い意味では哲学していることでしょうか。

私はそうだと思います。医療や福祉のあるべき姿や、それが人間の幸福にどう結びつくかを考えることは、まさに哲学していることだと思います。正解を求めて、考え、迷い、判断していますから。

しかし人間は不治の病におかされたり、死を前にすると、多くの人は哲学よりも宗教の方が必要となってきます。ホスピスなどはその良い例です。死を前にすると、人間は疑うことよりも、信じること、つまり絶対的なものにすがるという気持ちが強くなってきます。もちろんその一番大きな原因は、死の恐怖から逃れるということでしょうが。

この点哲学はその解答をもっていませんが、宗教は天国とか極楽といった来世が約束されていますので、それが心のやすらぎや安心につながるということで、宗教が求められるのだと思います。

もちろんそれは人間の弱さともいえますが、人間は年をとる、あるいは病気などで体が弱ってくると、その人の肉体だけではなく、精神も弱り、年をとるのだと思います。年をとるというのは悪い意味ではなく、疑いや迷いよりも、信じる気持ち、すなわち心の平安や落ちつき、それにいい意味でのあきらめや悟りという方向に心が向かうということだと思います。

したがって、私は死を前にした人に対して、「がんばりましょう」とか「元気をだしましょう」とか「希望をもちましょう」とただただ元気づけはげますよりも、もう少し患者さんが、心の安らぎと落ちつきの中で、死を迎えるという心の準備とか配慮が必要と思っています。それは宗教を信じる、信じないにかかわらずです。この点今の医療は、キリスト教の影響でしょうが、がんばりとか希望とかの側面が強く出すぎているように思います。

医療における哲学の応用、比較と分析について。

――哲学とは、「なぜという問いから始まる」ということは聞いたことがあります。しかしそういわれても実際は何をどのように考えていのかが分かりません。この点先生は具体的に哲学をどのように考えていますか。

哲学の何かは哲学者によっても考え方が違い、一言でいうのは難しいと思います。しかしあえて具体的にといわれますと、私は「哲学とは比較も分析も行わず物事を考えることである」と自分勝手に定義しています。

たとえば今仮に、「人間とは何か」と問われた場合、われわれは立って歩くとか、物を考えるとか、言葉をしゃべるというように答えますが、考えてみますと、これは他の哺乳動物と比較してそう考えているのが分かります。男とは何かと問われれば、女性との比較で考えることが常ですし、日本の医療や福祉のあり方を考える場合は、やはり諸外国との比較で考えることも多いと思います。比較というのは、そこにある違いをみつけるという、ある意味では簡単で便利な思考方法ですので、われわれはまず先に比較で物を考えるという習慣があると思います。

もう一つの思考方法は分析、すなわち物を細かく分けて考えることです。人間を肉体と精神に分けて考えたり、男と女に分けて考えることです。それに現在の西洋医学の診療科目のように、循環器は心臓、消化器は胃腸、整形外科は骨というように臓器別に分かれているのも、分析という手法によるものです。

もちろん比較と分析というのはまったく違ったものではなく、重なる部分もありますが、この二つの思考方法は、われわれが日常多く用いるものです。

そこで今仮に、比較も分析も行わず、「人間とは何か」と問われると、われわれははたと困ると思います。そういう習慣がほとんどないからです。それにこの点は大切ですが、比較なら比較する対象によって、分析ならどのように分けるかによって、その答が違ってくるということです。だからこの二つの思考方法は簡単で便利ですが、それだけに一面的になる恐れがあると私は思っています。

――先生は比較も分析も行わず物を考えることが哲学と言われましたが、それは実際どのように考えることですか。

以前私はデカルトの「我思う、故に我在り」という言葉の意味が分かりませんでした。今でもよく分かりませんが、しかし比較も分析も行わず、物を考えるとなると、「我在り」ではないですが、やはり自分というものを思考の中心において考えなければならないと思います。

「汝自身を知れ」という言葉がありますが、自分を知り、自分が生きてきた、あるいは考え感じたことを通して、人間の本能とか特性、それに人間の幸福や生きることの意味を考えていく、そういう視点が哲学の出発点になると思っています。だから、哲学するためには四十代とか五十代とかある程度の年齢が必要でしょうね。人生が夢と希望に輝いているうちは、哲学は難しいものです。

笑いとは何か、笑いとは心のリラックスである。

――その哲学を実際の医療や福祉に応用するにはどうすれば良いでしょうか。

直接的にはなかなか難しいかもしれません。しかし、哲学とは教科書的にだけ物を考えるのではなく、人間の本能とか本質というものを今一度問い直し、それを医療に応用していくものです。

たとえば人間の感情を考えた場合、泣く、笑う、怒る、甘える、すねるなどいろいろあります。ただ泣く、怒るというのは動物でもできますが、笑うというのは人間しかできません。これはなぜでしょうか。また小さい子供はよく笑いますが、年をとってくると笑うことが少なくなります。これもなぜでしょうか。

また笑うことは健康に良いといわれますが、笑うというのは、状態でいえば息を吐いている状態です。人間は緊張した時や力を入れる時は、息を止めているか吸っていますが、リラックスすると息を吐きます。吐く時リラックスしていると考える方が正しいかもしれませんが、リラックスは人間にとって気持ちの良いことです。だからハッハッと連続して息を吐き、それがある種の記憶と連動をして、笑いとなるともいわれています。大声をだすとか、歌うのが体に良いとされるのも、同じ理屈かもしれません。

ただ年をとると、体が硬くなるように、感情も硬くなるので、心のリラックスである笑いも少なくなるような気がします。そういえばまじめな人や頑固な人はあまり笑いませんが、これはリラックスが下手なのでしょうか。余談ですが、キノコのワライタケによる笑いは人間の体のどこに作用するのでしょう。またそれは通常の笑いとどこが違うのでしょうか。

話はちょっと脱線していますが、笑いという現象一つをとっても、いろいろな角度から考えることが可能です。それを医療や福祉の分野に応用したいということです。

悩みをどう考えるか、自律神経失調症の背景について。

――自律神経失調症という病気はどのような病気と考えられますか。

あまり他の医師はいませんが、私は自律神経失調症の患者さんの半分くらいは、（これはオーバーかもしれません）悩みの根底に経済的不安があり、それが原因だと思っています。お金のある人でも、現在以下の生活レベルになることへの不安という意味では同じです。

こういう患者さんに必要なのは、お金であり、安定した収入を得るための職業ですが、それはわれわれにはできません。むしろそういう患者さんからもお金をもらっているのが現状です。ただそれでも病気が治るのは、医師の言葉や安定剤が効いたというより、その状態に慣れたからだと思います。人は自らがあれこれと描く不安には耐えられなくても、実際その不安が現実となると慣れるのはそれほど難しくないものです。

余談ですが、よく時間が問題を解決するといいますが、時間が解決するのではなく、それに慣れるのに時間がかかるという、時間は結果だと私は思っています。

ボケはボケだろうか、美しくボケる為に。

――痴ほう（ボケ）についてはどのようにお考えですか。これからの高齢社会は、寝たきり老人とならんで、痴ほう老人が大きな社会問題となると思われますが。

痴ほうのとらえ方も、私は一般と多少違っています。たとえば次のように言う、痴ほう老人がいたとします。

「出ていけ」、「この家の財産は私のものである」、「お金が無くなった」、「嫁がとった」などです。

ところでボケたこの老人が「お金が無くなった」という時、はたしてそれは老人がボケたために、さい疑心が強くなり、そういうのでしょうか。単なるボケ老人のたわごとと考えてよいのでしょうか。

もちろん老人がボケなかったら、決してそういうことはなかったと思いますが、だからといって老人にそういう気持ちがなかったというのではなく、そういう感情は持っていたが、それは口に出さず、いわゆる理性の力によって押さえられていたと考える方が自然です。

確かにボケることによって、いくつかの感情が弱まり、欠落することはあります。しかし、かつて自分の心に浮かばなかった感情が、ボケたために現れることはないと思います。

人間は人間である以上、誰でも本音と建前があります。人間を人間たらしめるのは、建前の方です。建前は理性といってよいかもしれませんが、ボケることによって先に失われるのは、この建前の方だと思います。その意味では、ボケはまったく違った自分が現れるというより、より本質的な自分、すなわち理性の抑圧から解放された自分が現れると考えることもできます。

――そう考えますと、ボケることは恐ろしい気がしますが、ボケに対する予防とか対策があれば教えて下さい。

ボケが予防できるかどうかは、正直分かりませんが、美しくボケることは可能だと思います。そのためには本音の部分を美しくすることです。つまり悩みや苦しみを心の奥底にしまっておくのではなく、それを素直に話して解決しておくことです。また人に対するうらみ、つらみも無くしておくという努力というか人間的成長が美しくボケる秘訣だと思います。

同様のことが家族にもいえます。ボケ老人に対して、温かく、優しく接することは大切かもしれませんが、それ以上に肝心なことは、ボケる以前にそうしておくべきで、ボケてからでは遅すぎることも多いものです。ボケる前に優しくするのはヒューマニズムであり、ボケてから優しくするのは、センチメンタリズムであると私は思っています。

もちろんボケにもいろいろな種類がありますし、ボケの程度やボケ方もまちまちですので、いちがいにそういえないことも多くありますが、私はボケというものをそのようにとらえています。

宗教の役割、キリスト教と仏教の違い。

――最後になりましたが、先生は宗教というものをどのように考えられていますか。

私は宗教については、あまり詳しくありません。私の宗教に対する考え方は、仏教思想家のひろさちや氏の「仏教とキリスト教」をはじめとする著書に負うところが大きいです。

宗教の役割というものは、せんじ詰めればいかに安楽（幸福）に死ぬことができるかということだと思います。難しい言葉でいえば、宗教は安心立命を与えるものです。ただキリスト教と仏教ではその方法というか死生観がだいぶ異なるように思います。

キリスト教では人に天国という来世の希望を与えることで、人々は神をはありますか」と。どの家もどの家も、「はい」でした。どの家もどの家も、悲しい別離を経験しています。わたし一人が悲しい別離をしたのではない。ガウダミーにもその『真理』が少しずつ分かってきます。そして最後にガウダミーは悟ります。彼女はきっぱり『あきらめる』ことができました。

それが釈迦、つまり仏教の教えです。釈迦はぞんな方法で、多くの人々を救ったとひろさちや氏は述べています。

つまり仏教はあきらめを教える。あきらめは決して人生を放棄するのではなく、真実に目を向け、ありのままを受け入れるものです。あきらめの意味は「明らめ」。つまり明らかにすることです。

そういう意味では、あきらめは「悟りに通じるもので、死に対して恐れないことです。禅仏教はまさにそうで、死後の世界はないと信じても心の平穏を保つ、つまり死後の世界にはこだわらないとする生き方です。その点では、禅宗というものは宗教というより、哲学に属するとひろさちや氏は述べています。

キリスト教では天国があるし、仏教の中にも浄土宗のように「浄土」というものが想定されているものがありますが、これらの宗教では人々はそれを信じることで、安心して死ぬことができます。しかし本来の仏教では、極楽などの来世は想定されていません。

尊厳死を考える、人は生きてきたようにしか死ねない。

――最近安楽死とか尊厳死というものが話題になっていますが、この点は先生はどのように考えられていますか。

安楽死の問題はここで述べる余裕はありません。尊厳死については、その言葉自体に多少の疑問があります。尊厳死とは機械や器具などの人工装置によって生命は長らえないとするもので、それは尊厳死というより、自然死そのものだと思います。

もし尊厳死というものがあれば、死に臨んでも心は動揺しない、つまり死後はないと信じても、心は平然と死をむかえることができる禅宗のような死生観だと思います。もちろんそれは多くの人にとってできるものではありません。

ただ尊厳死に限らず、私は人間はどのように死ぬかよりも、どのように生きるかがはるかに重要だと思っています。私の祖母は正真正銘のクリスチャンで、百二歳で亡くなるまで宗教活動をしていましたが、日ごろの口ぐせは「人は生きてきたようにしか死ねない」というものでした。また俳人の正岡子規も「悟りという事は如何（いか）なる場合にも平気で死ねる事かと思って居（い）たのは間違で、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった」と述べています。

つまりどのように生きるかが、人間にとっては重要なことで、死のあり方とか死ぬ方法にこだわらない生き方ができれば、そうしたいと思っています。

ただキリスト教にしろ、浄土宗にしろ、天国や浄土があると信じるから、生き方が変わるし、反対に生き方が変わったときに、天国や浄土というものが信じられるものかもしれません。宗教とはそういうものであると、ひろさちや氏も述べています。

ただ私は天国や浄土など来世があると信じると、どうしてもこの世は「仮りの世」のようになると思いますし、だから一生懸命生きるという人もいますし、禅宗のように来世はないと信じるから、この世は立派に生きていかなければならないというような心構えになってくるような気がしています。だから現在の私は禅宗により多くの共感を覚えますが、死を前にするとどうなるか分かりません。

――どうもありがとうございました。

「人間の本能とか本質というものを今一度問い直し、それを医療に応用していきたいと思います。」

インタビュアー
森田 真由美さん
（RKC高知放送リポーター）

PRのページ
ハウス美装㈲　四国医療サービス㈱　㈲昭和メディカル　有限会社 マツダ興産　㈲シー・エム・エス・里の会